

# 交野市の民俗

35期生

## I テーマ設定の理由

交野市に転居してきて、はや1年が過ぎた。都会といわれる大阪市から田園都市としての姿をとどめている交野に来たわけだが、私はこの交野市にとっても興味をひかれるものがあった。それは、古代交野の姿である。

地名、駅名などに星に由来するものが多いなと思っていたのだが、それは歴史的にとっても重要なもので、古代交野への扉のカギであった。

## II 研究方法

### (1) 方針

交野市の民俗を、主に歴史的な面からとらえていく。

### (2) 方法

テーマが「交野市の民俗について」という大きなものなので、一つ一つ項目に分けて調べ、最後に「交野市の民俗について」としてまとめることにした。

## III 研究結果

### ① 交野市の歴史

#### (1) 1万年も昔から人々は住んでいた!

交野市には、1万数千年前から人々が住んでいたといわれている。遺跡も多く、倉治の神宮寺(じんぐうじ)遺跡ではナイフ形石器と尖頭器の石器が発見されている。

このころの人々は、交野の山中を、いのししやしか、草木などを求めて生活していたのではないだろうか。

また、どの遺跡も共通して、扇状地上部や河川をのぞむみはらしのよい丘陵から発見されている。これは、生活条件が良いからだろう。

#### (2) 古墳時代の謎

交野市にも古墳が数多くあり、特に交野山麓には、小型円墳群が多い。森古墳群といわれるものは、最上部にあり最も早く築造されたと思われる。雷塚古墳は、古墳前期の全長120mの大きなもので、下方に向かい四基の前方後円墳と三基の円墳が築かれている。

これらの古墳群は、いったい何を意味しているのか。この時期にこれほどの大規模な古墳をつくれるのは、大和政権に関係のある「肩野物部氏の一族」と考えられる。日本



神宮寺先縄文時代遺跡

書記にもその名を表しており、「肩野」といわれる古墳ではないかと見られている。

交野を流れる天の川流域には、わずか7kmの間に、森古墳群、妙見山古墳、郡津古墳、郡津丸古墳、枚方市の藤田(とうだ)山古墳、禁野車塚古墳、ヒゲ山古墳、万年山古墳など規模も大きく、形式も古いものがずらりとならんでいる。

ということは、古代、この流域にレベルの高い文化を持った人々が住んでいたと考えられる。

交野地方では、天の川流域で発展した農耕文化とは別に、交野山麓でも発展していたと考えられる。これら、高いレベルの文化ということ、思い浮かぶのは渡来人である。古墳後・末期ごろ(7世紀)、交野やその地域の山麓一帯に機織の技術を持った渡来人のむらが営まれていたようである。おそらく、近辺の農耕びとと交流し、「むら」は栄えたと思う。

### (3) 文学の中の交野

交野地方は、数々の古典文学の中にその姿を表している。これらは、私があちこちの本から探し出したほんの一部である。

☆ 古今和歌集(905年?)

「狩り暮らし棚機つめに宿からむ天の川原にわれは来にけり」 在原業平の歌。

◎ 今日一日狩り暮らしして、こよいは織女星に宿を借りよう。天の川原に自分は来たことである。

注: 棚機つめ……織女星のこと。 宿からむ……宿をかりよう。

在原業平(ありわらのなりひら)が惟喬(これたか)親王のお供をして狩りに行った時、天の川という名の川に下りて休み、酒などを飲みかわしたが、その時に親王が狩りをして天の川原に来たというおもむきを詠めといわれたのでこの歌を詠んだという。

◎ 目の前の天の川を天上の天の川になぞらえたもの。

☆ 枕草子(1000年頃)

「野は交野……」清少納言。

◎ 自然のすばらしさをたたえている。

☆ 新古今和歌集(1205年)

「またや見む交野の御野の桜狩花の雪散る春のあけぼの」 藤原俊成の歌。

◎ またと見ることがあろうか、見られないであろう。名にし負う交野の桜狩において、折しもほのぼのと明けゆく中に、花の雪がはらはらと散るこの美しい景色を。

◎ 交野地方は昔、一般人の狩猟は禁止され、もっぱら京都朝廷の御猟場であった。

☆ 太平記(1370年頃)

「落花の雪にふみ迷うかた野の春の桜狩り紅葉の錦を着て帰る」

◎ 交野は昔から桜の名所として知られ、現在、桜は市の木となっている。

☆ 南遊紀行(江戸時代)

「砂川にて水少く、其川白くひろく長くして、恰も天上の銀河の形の如し、さてこそ

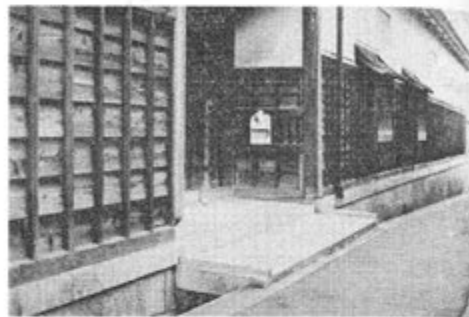
天の川と名づけたれ」 貝原益軒の歌。

他、伊勢物語（905年以前）土佐日記（935年）などにも出てくる。

交野は歴史の古い町ではないだろうか。そして、その町の文化、民俗はどんなものなのだろうか。

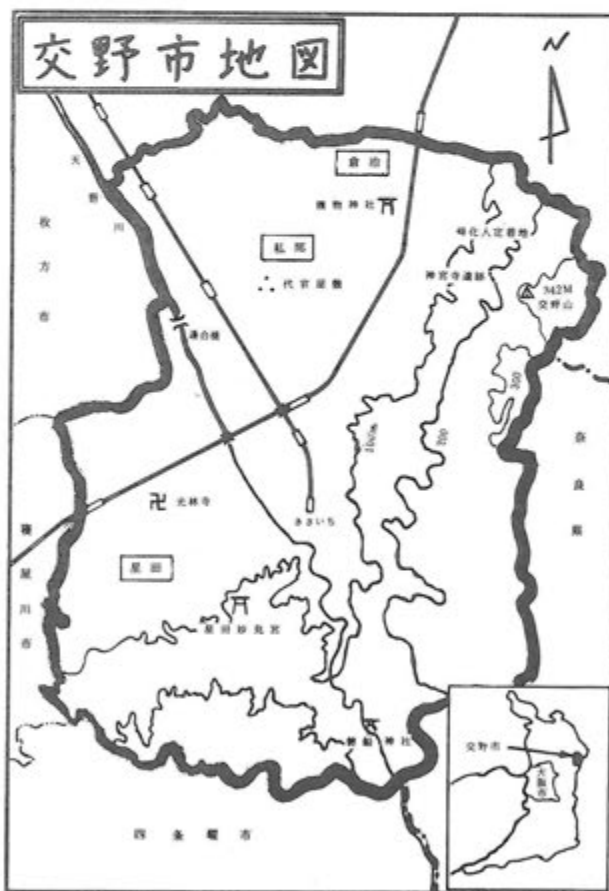
#### 〔4〕武士の時代の流れ

室町時代には、交野も応仁の乱に巻き込まれ、戦乱に明け暮れる日が続いた。民衆は疲労と貧困にあえいだ。しかし、徳川時代に入ると、世は一定の安定を見、以後明治までの約300年間は平和な日々が続いた。だが、農業、河内木綿の生産で暮らしをたてていた民衆は、代官による幕府直轄領と譜代諸侯の領地に細分され、生活は苦しかったようである。



私部の代官屋敷

#### 〔2〕地形・気候面から交野市をみつめて



地形の読図には、国土地理院発行の2万5千分の1の地図を使って自分なりにやってみることにした。

#### 〔1〕位置

大阪府の東北部に位置し、東部は生駒山系を境に奈良県に接し、西は寝屋川市、南は四条驛市、北に枚方市が隣接している。

#### 〔2〕面積

東西の広がり4.5km、南北6.5km、面積25.29km<sup>2</sup>

#### 〔3〕地形

##### ① 山地

昔は岩山ばかりで草木一本ない山でいったん大雨が降れば、水が山の斜面を流のようになって下り洪水となった。近年、交野の山々は木が緑深く山肌を包んで少しぐらいの雨では、谷川へ大水を流すことは少なくなった。

##### ② 河川

昔から山が荒れていたため、天井川が多く洪水の危険にさら

されており、主な河川の改修がされている。

#### ③ 地形のようす

交野市から枚方市に続く、標高50～100mの山麓地があり、免除川・南川などが枚方台地の上に天井川をつくっている。生駒西山麓地は、主に風化花崗岩や、大阪層群からなっているが、現在、斜面崩壊による崖や土石流の堆積があり、山麓地を3～5m侵食して流れ扇状地が西部につくられている。

#### 〔4〕気候

	交野市	大阪市
年間平均気温	15.5℃	15.8℃
降水量	1407mm	1094mm

大阪市と年間平均気温、年間降水量を比べてみると、降水量が目立って多く、気温も少し低いことがわかった。また、台風の被害を受けることが多いので、交野の家は、「基礎を固め、柱を太くし、壁を

厚く塗り、屋根を重く頑丈にして瓦を針金で固定」して防衛策としている。

#### ③ 地名の由来

昔の人々の暮らしを知るために、地名の由来を調べたり、自分で想像したりしてみた。

交野市の地名は下記の通りである。

〔町名〕（五十音順）

- ①青山 ②天野が原町 ③幾野 ④梅が枝 ⑤私市 ⑥私市山手 ⑦私部 ⑧倉治  
⑨郡津 ⑩神宮寺 ⑪寺 ⑫寺南野 ⑬南星台 ⑭東倉治 ⑮藤が尾 ⑯傍示 ⑰星田  
⑱星田山手 ⑲松塚 ⑳妙見坂 ㉑妙見東 ㉒向井田 ㉓森 ㉔森北 ㉕森南

〔駅名〕 国……国鉄 京……京阪電鉄

- ①交野市駅 ②河内磐船園 ③河内森原 ④私市駅 ⑤郡津駅 ⑥星田園

「交野」は「倭名類聚抄」で、「加多乃」と詠まれとても古い。（最初の分類体百科辞典）

また、淀川べりより望むと、この地が一段高く台地状に広がっているので「肩野」と呼ばれたのでは？

交野には空とつながる地名が多い。②天野が原町 ⑬南星台 ⑰星田 ⑱星田山手などがある。これはたぶん、天の川伝説によってだろう。これについてはのち説明する。

また、星田に八丁三所というものがある。これは、弘法大師が獅子窟寺山で秘法を唱えられた時、大空から七曜の星が降り、それが三つに分かれて星の森、光林寺、妙見山の頂上に落ちたという伝説がある。㉑妙見坂 ㉑妙見東などはここからきたのだろう。

㉓森 ㉔森北 ㉕森南は森が、⑪寺 ⑫寺南野は寺がある（あった）ので、そう呼ぶのだろう。

⑦私部は、敏達天皇の皇后、農御食炊屋姫（のち推古天皇）の土地や部民の呼び名が残ったものである。注：「きさい」は「きさき」、「べ」は「部民」のこと。

⑤私市 ⑥私市山手も、上と何か関係あるのではないだろうか。

⑧倉治はその昔、他の村から集められた織物の倉などがあったからではないだろうか。

⑩神宮寺は、神社と寺が一緒にあるところの地名で、帰化人の定着地と考えられる。

◎この中には私の想像部分が多いので確かとはいえない。

④ 天女の羽衣伝説から……

天女の羽衣伝説、あの七夕の舞台となった物語のことである。

☆ 昔、ひとりの天女が、天の川で水浴していたところ、ひとりの少年がたむむれに天女の衣を隠したので天に帰ることができず、少年と夫婦になった。が、三年の後、衣を得て天へ飛び去ったという。☆

これは平安時代に生まれたようで、おそらく農耕文化の発展を意味しているのであろう。

昔、天の川は「甘の川」といい、この天の川流域には、星辰信仰が広がっており京阪交野線には星ヶ丘駅、国鉄片町線には星田駅がある。星田妙見宮の神体は織女石、枚方市茄子作の牽牛石、星田光林寺の星石、倉治の機物神社などが点在する。天の川の下流には、鶴橋、逢合橋がある。

また、天野川上流には、<sup>にぎはやみのこと</sup> 鏡速日命が船に乗って天を降りてきた磐船神社があり巨岩群の岩くぐりができる。これも空にまつわる伝説である。

磐船神社の岩くぐりのように交野の山々にはとても大きな巨岩が多い。倉治東方にある 340 m の<sup>こよのさん</sup> 交野山頂上には、巨岩がそびえている。その<sup>悠久</sup> 姿は古代人の信仰の対象となった。このころの古代人とは……。

歴史の面から調べた時、倉治の山麓には、機織技術を持つ帰化人庄員の一族が住んでいたということがわかった。ということは、その古代人は漢人であろうか。

そして、七夕伝説とはもとをたどれば機織技術……ここからでたのではないだろうか。

⑤ 交野の文化のもとは何だろう？

歴史的な面から見た交野の次は、経済の面もあわせ、文化をつかんでみたいと思う。

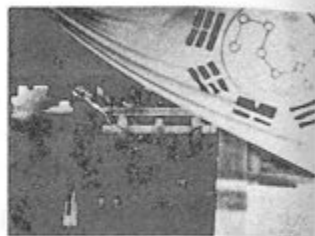
古代には、肩野物部氏、漢人庄員などによって文化の発展がもたらされ、さらに平安時代には狩猟場となりながらも、農耕技術の発展は進んだ。そして戦乱の世に入り、武士による厳しい政治支配をされる。しかし、ここで地形的に経済面を考えてみることにした。

すると……交野は、京都と大阪の中間にあるため、江戸時代がぞくぞくと伝わっているのだ。それは今でも影響しているといえるだろう。もしかすると、方言の中でそれがわかるかもしれない。

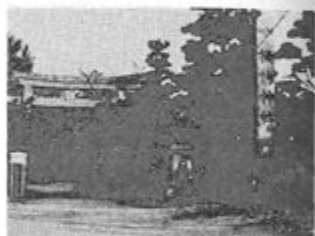
また、巨岩が多くあることも関係しており、豊臣秀吉が大阪城築城の時、諸侯に命じて巨岩を運ばせたという説話もある。

水が清いということから、江戸時代には交野のどの村にも一、二軒のつくり酒屋があったらしい。(現在も二軒現存) 私はそのつくり酒屋を訪ね、交野に関することを色々聞いた。

「交野は諸民と貴族が<sup>⊗</sup>わる野の狩り場ということで、枚方の禁野は諸民は立入り<sup>⊗</sup>止



星田妙見宮の神体「織女石」



倉治の機物神社

の狩り場だった。御殿山には、親皇の御殿があった』ということや、「交野の城主は摂津富田におり、代官は私部に住んでいたのだからこのあたりは開けたところだった』ことを聞いた。この地方に現在も伝わっている方言の一例

「がいやん」蛙のこと。(いぼがいやん……土蛙、ラーがいる……食用蛙)

「ぼうちやくする」往生すること。語源は行きつもどりつさまよひながら到達することの仿着。また、堂塔の軒にかけてある大きな鈴を<sup>どうどう</sup>宝鐸ということから転化したもの。京都や奈良の寺院で宝鐸の取扱いをどうしてするのか、考えられたことから生まれたものか。どれかはわからないが、交野でも昔、長宝寺双塔の建立にたずさわった人がいて、宝鐸を取扱ったので伝承された言葉かとも思われる。

IV 結論

今まで調べた結果、交野の民俗についてまとめてみると、次のようなことがいえる。

古代からの文化交流により、江戸時代以前は農耕を中心とするなごやかな文化が開けていたということになる。その中で人々は、空、星にまつわる伝説を作りあげ、美しい風習を持っていた。そして、その信仰は帰化人たちの生んだものなのである。農耕を中心とした文化の中には、京都・大阪両都の新しさを感じるものもあった。人々は気候の面からも工夫し、都にはみられない頑丈な家をつくった。交野独特のなごやかな美しい風俗は、美しい民俗文化をつくりあげたのだろう。そして現在、新しい都市開発に市全体で取り組んでいるところである。これからも美しい民俗が作りあげられていく交野である。

V 総括

「結論」としてこれらの資料をもとにまとめあげるのはとても困難であったが、私なりに考え、交野の民俗なんてそう簡単に結論づけられるものではないと思った。たいした参考文献も使わず、色々な本、冊子から抜き出し、まとめ、勝手に結論づけたり、地域の人々に協力していただいてレポートし、それをまとめ、結論へ……。この研究をしていると歴史が奥深く感じられ、まだまだ研究する価値があると思った。私自身、この交野について、とてもたくさんを知りたい機会であったと思う。これからも、何年、何十年と住み続ける交野の地にこれほどの民俗があったのか……。前に住んでいた大阪市内との比較ができなかったのは少し残念に思うが、私には非常に勉強になった。

★ 参考文献

- 「まんだ」 地域文化誌
- 「かたの」 小冊子
- 「大阪の伝説」 角川書店 etc.

★ 協力

- 山野酒造株式会社 社長 山野 久氏
- 大阪管区気象台
- 交野市役所



清酒のレットル